

私の学問と民主主義

佐々木 建
Sasaki Ken

京都グローバリゼーション研究所

eブックシリーズ 1

本書の全部または一部を複写・複製（コピー）、転載する
には著者の了承が必要です。

目次

まえがきー私の学問と民主主義ー

本書の概要

I 私の大学

1 私の大学

7

私の大学

大学へのあこがれ

学生

大学教員

研究業績

・
・
・
6

・
・
・
1

2 教養とは何か 32

3 学びをめぐる相克はガリレイの屈服に始まった 37

―B・ブレヒト『ガリレイの生涯』を讃えて―

II 学者の社会的責任、大学の社会的責任 48

―東北大災害と学者たち―

I 学者の社会的責任、大学の社会的責任 49

―三・一一追悼の日を迎えて―

2 学者たちに社会的責任を自覚させるにはどうしたらよいか 56

―池内了氏の意見を読んで考えたこと―

Ⅲ 連帯の人間科学をめざして . . . 68

ーグローバル資本主義に抗してー

暴走する制御不能のモンスター 連帯の経済をめざして

労働と市場をとらえ直す 経済の国民的特性を再構築する

類的能力の復活をめざして

著者紹介

まえがき

―私の学問と民主主義―

学問とは何だろうか。だれもが大学に集積されている知識の体系ではないかと考える。その言葉の響きは大学の外に生きるものにとってはある種近寄りがたい雰囲気を漂わせ、それから派生する多くの言葉によって学問は一層権威主義的な雰囲気に包まれる。

私はこのような権威主義的理解とは一線を画したいと思う。

学問という言葉を、知識水準や社会階層にかかわりなく、学び究めるという意味で、人間の普遍的権利と理解したい。そのように理解すると、体系化された知識の集積は誰に対しても平等に自由に開かれていくものとなる。

大学で研鑽を積み学位を得て大学教員の地位を獲得したひとたちは、この集積に独占的に接近できる特権層のようにもみえる。しかし学問は決して彼らの独占物ではない。大学に学ぶということは学問の手ほどきをしてもらうということであつて、進学できない人びとよりも接近が容易になるというだけのことではないか。

学問、この言葉を私はこよなく愛する。いつも学び究めることに熱中していたいと願っている。そのような意味で学者でありたいと願っている。そのことを通じて、特権者としてでは

なく、つねに人間的連帯感に満たされた学者であり続けたいと願っている。

うれしいことに、この国の憲法は第二三条で「学問の自由は、これを保障する」と宣言している。特別の条文によって学問に無限定の自由を保障している憲法は世界にあまり例がないのではないだろうか。いうまでもなく、これは戦前に治安維持法によって大学教授や学生たちに加えられた過酷な弾圧に対する反省をこめての宣言であろう。しかし私はこの条項にそれ以上の思いをこめたいのだ。

市民的権利として普遍的権利としてその自由を宣言するからこそ、大学とその構成員の活動も市民によって支持され擁護されるのだ。この関係を忘却して、特定利益集団に取り込まれたとき、あるいは提供される利益に自らすり寄る時、人類が直

面する課題に真摯に対応する態度を失った時、アカデミズムはもはや大衆の支持をあてに出来なくなる。

大衆の学びの権利との豊かな交流こそが学問の自由の保障である。民主主義という言葉こそが学問のありように最もふさわしい言葉ではないか。これが私の学問観であり、本書を一貫する基調である。表題を「学問と民主主義」とした理由もここにある。

二〇一三年八月

佐々木 建

本書の概要

以上のような視点から、本書では学び究めることと民主主義との関係についてこの一〇年ほどの間に考えたことを三つの側面からまとめ、新しい学びの形を模索する。

Iでは、私のこれまでの人生の大半を占める大学での体験を軸に私の学問観のいわば原点を回顧し、大学時代に獲得されるべき地球市民的自覚と感性を論じ、私のこの問題に対する基本的な視角を示す。

IIでは、東北大災害の際に現状是認的態度に終始した一部の学者と彼らが在籍する大学や学会のモラルハザードに対する批判を通じて、学者と大学の社会的責任について問題提起し、過去に学者たちが示した倫理的規範にたち返ることを求める。

IIIでは、人間的連帯を基礎にした新しい社会科学の構築を目指す私の現在の学問的視野を示し、民主主義を実態あるものとして追求する学問の発展を提唱する。

I 私の大学

1 私の大学

私の大学

「私はカザン大学に学びにゆく」、一九二三年に刊行されたマキシム・ゴーリキーの自伝的小説『私の大学』はこのように始まる。この短い文章にゴーリキーの大学へのあこがれを感

じとつて、私は熱くなる。もちろん、この小説を知つたのは、私が大学進学を決意した頃ではない。ずっと後のことだ。しかし、私はこの表現に自分自身の大学進学への思いとあこがれをいつも重ねあわせてきた。私の生まれ育つたまちは大学とはまったく無縁の地であつた。大学進学を志した頃の私のあこがれをゴリーキー流に表現すれば、「私は内地の大学に学びにゆく」とでもなるであらうか。

最底辺層の出身であつたゴリーキーが帝政ロシアの時代に大学に入学できるはずもなかつた。彼にとつてのカザン大学とは、カザン社会の最底辺の人びととの交わりのなかで学んだ普遍的な世界と革命思想であつた。その学びの広がりや深さには、私のこの数十年にわたる学びの水準などはるかに及ばない。

二〇〇六年春に私は七〇歳となり、最終的に大学教師を辞

した。私が大学に入学したのは一八歳の時であつたから、半世紀以上にもわたつてさまざまな形で大学にかかわつたことになる。長くも短くも感じられたこの時間のなかで、大学は私にとつて尽きることはない知識の泉であり、「私の大学」を私のなかにはぐくんできた。私の向上心の源であつた。と同時に、学生として、教師として、学者として、そして管理者として関わつた現実の大学制度は、「私の大学」への渴望との葛藤、相克の舞台でもあつた。

私が去つたのは制度としての大学であつて、普遍的な学びの場としての大学ではない。私の中で大学はつねにあこがれの対象であつたし、進歩の思想を学ぶ最重要の場であつた。そのことはこれからも変わらない。しかし、区切りをつけて大学への思いを書き残してみたくなつた。

大学へのあこがれ

大学はあこがれの対象であった。私のまわりにはまったく存在しない、また存在しえない知的雰囲気と知的資産が集積された聖なる場所であった。内地の、しかもその都会の聖地で学ぶことは、当時の私の家の経済的貧窮からみてかなわぬ夢に思われた。「内地」は、地の果てのようなみすぼらしいまちにみずぼらしく住む者にとっては、容易には到達できない「外国」にさえ思われた。その聖なる場所にたどり着くこと、それが私の大学入学の動機のすべてであったといつてよい。

「内地」という表現がいまでも北海道で使われているかどうかは知らない。北海道の住民は、私が生を受けた頃にはまだ自らを入植者と位置づけ、津軽海峡を越えた彼の地にある故郷

とその精神こそが本来住むべき、依拠すべき場所と信じていた。北アメリカの入植者たちが自らの地を「新世界」と誇らしげに宣言したのとは大違いだった。

札幌農学校の出身者たちを例にフロンティアスピリットを称揚する議論も盛んだったが、北海道のそのまた「僻地」に住む私の劣等感を消し去ってくれるものではなかった。フロンティアスピリットは、いま考えると戦後民主化を操作するためのイデオロギーとして利用されたのではなかっただろうか。

このような知的環境の格差は、戦争によって絶望的なまでに拡大し固定された。私のまちにあるいは存在していたのかもしれない知的財産の集積は空襲によって瞬時に消え去った。そのため中学・高校時代の私の読書は惨めなものになった。いまでも私はそのことを羞じている。高校の図書室にも読むべき新

刊書や雑誌など並べられてはいなかった。大学進学は、このよ
うな知的貧しさからの私なりの脱出の方法でもあった。内地に
は、このまちにはないすべてがあるように思われた。大学は私
を知的欠乏から救済してくれる聖地そのものだった。

私の入学した大学の教養課程は、旧制高校の校舎が空襲で
焼失したので、昔の陸軍幼年学校の校舎を使っていた。学部構
内にも戦争の爪痕は方々に残っていた。受験参考書にはみすぼ
らしい焼け跡もバラック同然の建物も紹介されていなかったか
ら、これが大学の建物かと驚かされたものだ。

しかし、建物や設備はともかく、私の知的好奇心は十分に
満たされた。都市出身の友人の中には講義のレベルの低さを嘆
き、図書室の開架図書の少なさを指摘する人もいたが、私には
すべてが目新しく新鮮であった。私の読書遍歴は図書館の開架

図書から始まり、手当たり次第無差別に読みあさる読書性癖はこの時にできあがった。

教師も個性的な人が多かったと思う。学生に心開いてくれた多くの体験を思い出すと、いまでも気持がたかぶり熱くなる。私は大学が保障してくれる「学ぶことの自由」に浸りきり、学ぶことを媒介にして実現した「平等」に満足した。教師も学生も学ぶ仲間として平等であるように思われた。私はこの情景に満足した。

この平等主義、これが「私の大学」の何物にもかえがたい普遍の原理となった。大学にも大学教師にも学者にも「権威」はいらないのだ。

学生

大学入学とともに、生徒から学生へと呼び方が変わった。

このことがもたらしたえもいわれぬ開放感と喜びはいまも鮮烈に思い出される。束縛されずに自由であると言うだけではない。

「学生さん」と市民が呼んでくれることには、親近感だけでなく学生に対する地域社会の信頼が表現されていた。

「学徒」という言葉がよく使われる。しかし「徒」という言葉に、私はよい印象を持ってない。もともとは歩く仲間という意味なのだろうが、とにかく使われ方がよくない。暴徒、博徒等、悪い例をあげるときりがない。それに学徒動員、学徒出陣等、第二次大戦のあのいまわしい体験を思い起こさせる。学ぶことは個人の自覚から始まる。群れてすることではない。だか

からこそ私はこの学生という言葉に、いまも自分が学ぶことへの
思いを託す。

大学院に入学してもまだ学生のままであつた。その頃から
大学院学生は学生か院生かという議論が巻き起こつた。出来た
ばかりの大学院の教育・研究条件は劣悪であつた。制度を作つ
たのに、充実させる財政措置はまったくといってよいほどとら
れなかつた。しかもその頃は、旧制大学院制度、さらには戦時
下に人材確保のためにつくられた特別研究生制度もまだ残つて
いた。明らかにそちらのほうが厚遇されていた。同年齢で助手
に採用される法学部の若手に比べると、他の学部の若手は研究
条件も生活条件も劣悪であつた。

そのような格差の原因は学生という身分にあると考へたの
である。全国の大学院で自治会、院生協議会（いわゆる院協）

が結成された。学生に権利なし、学生の分際だと要求が拒絶されることが多く、学ぶ仲間として平等に扱われることがない状況では、学生の呼称にこだわるのはやむを得ないことだった。大学院生という言葉がその時以来定着することになった。

そのことに関連して思い出したことがある。私が大学院学生の頃は院協活動を朝日新聞社が支援してくれており、記者の紹介で当時の文部大臣と大臣室で会ったことがある。私が大教室なるものに入ったのは後にも先にもこれっきりでである。

若い頃にアメリカに渡り苦学して大学を卒業したのが自慢で、大学院「学生」に教訓を垂れようと時間をとってくれたのだろう。その「テキサスの松」文部大臣は、親のすねをかじらずに自力で頑張れと言わんばかりの態度だったものだから、参加した大学院「学生」の総攻撃を食らうことになった。痛快な

ひとときではあったが、かわいそうなのは仲介してくれた文部省の課長であった。顔面蒼白になっていたことを思い出す。

いまになって考えてみると、「院生」という呼称にこだわったのは間違っていたと思う。あのころは、いまと違って博士課程終了時に博士論文を書く、あるいは書けるなどという雰囲気ではなかった。みな大学教師を目指して「研究業績」を出すことに精を出す場所であった。そのために、特別研究生や助手なみの待遇が欲しかったのだ。

大学院は基本的には課程博士を授与されて終わる教育機関なのに、それが理解されていなかった。誰も課程博士を出せと要求はしなかった。設立されて半世紀を超えるというのに、独立の教育機関としての充実は先送りされているだけでなく、学位授与については少しずつ変わりつあるものの、社会科学の分

野では、大学院学生の側に学位取得を目指すという自覚はまだ低い。

以前に在籍していた大学で二十数年ほど前に体験したことだ。そのころ私は学位を取りやすくするように制度改革に着手していた。大学院自治会との交渉で、このことが話題になった時に、課程博士を取るとどのようなメリットがあるのかと問われた。私は啞然とした。課程博士は高い学習能力を持つ人物として社会に認知される資格である。しかも国際的に通用する資格である。これがなければ、あとで困りますよ、一本や二本の「研究業績」を出すよりはるかに重みがありますよと答えたが、理解してもらえなかった。

冒頭の話に戻ろう。大学を去って学ぶ私は自分のことをどのように定義すればよいのだろうか。「学生」を自由に学べる

人として再定義し、再び学生に還る、これがよい。これが私が半世紀以上かけて獲得した学生観である。

大学教員

私の大学へのあこがれは入学した頃とは少しずつ変化し、形を変え始めていた。専門課程に進むころから私は急速にマルクス主義に傾斜していった。大学では「学ぶことへの自由」にも多くの制約があること、後光が差すほどの学識の持ち主である教授でも学生たちの主張にかたくなな人たちがいたし、アカ攻

撃雑誌の記事に名前が載ったといつて保身をはかる人も少なからずいた。当時から目立ち始めたアメリカの対日工作に身をゆだねて変節する教授もいた。学生運動のリーダーや共産党員の学生を目の敵にする教授たちも多かつた。

時流におもねって生きる人はいつの時代にもいるものだが、許されることではないと思われた。戦前の治安維持法によつて検挙され、戦後に復職した教授たちに対する畏敬の念はいや増すばかりであつた。

その当時の私たちの雰囲気はその後、全共闘運動に参加した学生たちにも現れた。彼らのいう「スターリニズム」に距離をおいた宇野弘蔵教授やスターリン批判騒動に嫌気がさして遁走した教授たちがもてはやされた。しかし、私の時代の風潮とはかなり違つていた。彼らがもてはやされたのは、「スターリ

ニズム」に汚染されていないという、ただそれだけの理由からだったと思う。

宇野の非実践性、現状分析に対する無為無策も問題にはならなかった。彼らの主張した「大学Ⅱ労働力商品生産工場」論は、案外宇野の原論の都合のよいところのつまみ食いだったのかもかもしれないし、彼らの即物的実践性の背後にある非実践的性が宇野と呼応したのかもしれない。そう考えてみると、彼らのその後の変身も理解できるというものだ。

大学がいつの時代でも権力に対して完全に自由であったためしはないのだが、普遍的自由と平等を実現できるゴリキータな「私の大学」への渴望が高まり、私は学生運動と政治活動にその夢を託していくことになった。そんな私があるところか大学教師になり、しかも七〇歳まで大学の現状をぐちりながら働

き続けてきたとは、なんという皮肉だろう。その経緯と葛藤をここで書くつもりはない。弁解じみたことも沢山書かなければならないからだ。

私の大学教員としての生活は「私の大学」へのあこがれと現実との狭間でたえず引き裂かれ、その葛藤のなかで漂流し続けた。動揺し、ときには世俗に傾斜していると誤解されもした。

とりわけ大学紛争は私にとって大きな試練であった。全共闘運動に専門馬鹿とか、たこ壺式研究とののしられ、象牙の塔を打ち壊せとばかりに物理的に破壊されるのには、はらわたが煮えくりかえる思いがした。大学自治の真の発展を目指していた若い教師にとっては、彼らにそのようにののしられたくなかった。彼らに私たちをののしる資格はないと思った。彼らは批判の基準を持てるほど学んでもおらず、大学の体験も浅かった

からだ。

学生たちの苛立ちを理解できないわけではなかった。私の学生時代以上に大学は自由のない、隙間のない窮屈な世界に變貌をとげ、まだ残っていた研究の自由も制約され、産学協同の場に化しつつあったという時代背景との関係は無視できなかつたからだ。

今の大学の状況は大学紛争時代よりもはるかに惨憺たるものだ。彼ら学生たちが壊すと主張した保守的秩序はますます強固になってしまった。よく観察すると、いまのリーダーたちはいわゆる全共闘世代で占められ、大学のリーダーたちにもかつて運動に参加した人たちが多い。「大学改革」のリーダーたちが、趣味みたいな研究をしている教授もいると学問を口汚くのしるのも、かつて学者たちを専門馬鹿と愚弄して物理的に破

壊し、肉体的に追いつめた全共闘運動のイデオログたちと同じではないか。あの頃活動家と称する学生たちのなかには、大
学解体を叫びながらヘルメットを脱いで従順な学生になりすま
し、教室にきて平気で講義を聴いていたやからもいたし、教師
を脅して単位をせしめていた連中もいたことも思い出される。
その俗物性にあきれかえったものだ。

現状を世代論で理解しようとは思わないが、かつての俗物
性がいま再生され、権力と金力に無抵抗な大学破壊が進んでい
るように思われてならないのだ。

学者は根無し草のようなものだ。経済システムに確たる基
盤を持っていない。社会の度量の広さによって生かされている
にすぎない。社会が無用にも見える学問分野や革命的すぎる学
問を大学の中に生かす度量を失えば、簡単に放逐される。歴史

はこの悲喜劇を幾度となく繰り返してきた。今のような産官学協同の推進もそのような時代の到来なのかもしれない。

自分の学問を自嘲的に「趣味みたいなもの」と表現するとはあるかもしれないが、それはそのような学問も生かされていいという願望や、それが生かされていた時代への郷愁の少々ひねくれた表現というものだ。有史以来学者たちが曲学阿世と罵られ焚書されようとも維持してきた制度と伝統を、さらには大学がまもり続けてきた人類的責任をののしることは許し難いことではないか。

研究業績

大学教員とは「研究業績」という悪夢に悩まされ続ける職業である。場合によつてはその「業績」によつて道を誤ることもある。

「業績」という言葉の本来の意味はなにか。中国に由来する言葉ではない。国語辞典を引くと、もともとの意味は営業成績だという。売上高をどれだけ伸ばしたか、利益をどれだけ増やしたかという経営的成果のことである。この成果は大抵の場合、貨幣量で時間を限つて表現される。結果を求めて呻吟し、一進一退をくり返して実現した成果を表現するのに何のこたわりもなくこの言葉を使い、自らの仕事を誇らしげにリストアップする。奇妙なことではないか。

だれがこのようなおぞましい表現を学問の世界に持ち込んだのだらう。私が大学院の頃はまわりではまだ使われていなかったと記憶する。論文を書きなさい、学会報告をしなさいと、教授に尻を叩かれはしたが、研究業績をあげよとは言われなかつたと思う。どうやら関西あたりに起源がありそうな気がする。

大学院在学中のことだ。関西の某大学から赴任してきた若い教師の言うには、関西では大学院生の研究成果は、論説は何点、研究ノートは何点、書評は何点と点数で表示され、採用人事もその総合点で決まるのだという。これには驚かされた。

私が学んだ大学院はそれに比べるとまだまだ牧歌的だった。大学の学会誌は年報の形で年四回刊行されていた。長い論文を載せてくれるのが伝統で、長いものを書くように指導された。教授の研究発表に隙間ができたときに大学院生の論文も掲

載してもらえた。大学院学生の場合は第一作は研究ノートとして掲載し、それから論説に取りかかるといのが慣習化されていた。論説では教授も大学院学生も対等に扱われた。私も研究ノート一本、論説一本を掲載できて、関西の大学に助手として採用される機会をとらえることができた。関西的業績主義の基準に依拠すれば、私の評価はきわめて低い筈だったのだが。

この関西的評価基準には多くの問題がある。まず個々の論文の量の違いを度外視している。私の場合は、論説では四〇〇字で一〇〇枚相当を書き、研究ノートもそれくらいだったと思う。五〇枚が上限とされる雑誌と比較すれば、私の仕事はほぼ四本に相当する。さらに言えば、これは質の違いにも関わってくる。一〇〇枚なら体系的にじっくりと論証できる。これに対してテーマを細分化した論文の質はどうだったのだろうか。

人事や学位審査に関わって研究成果をどのように評価するかは、大学がこれまでに直面してきた問題のなかで一番悩ましいものである。論文の質や水準を分野の違う人や研究手法の違う人が評価するから、どうしても本数に頼ることにならざるを得ず、質や水準は二の次となる。引用回数で評価基準を決める試みもあるが、細分化すれば引用回数も多くなるし、社会科学の場合にはいまだに師弟関係や同窓が重要な役割を演じている。当然身内やボスの仕事の引用が多くなるから、これも当てにならない。研究分野、専攻分野によって研究成果の評価基準が違うことも考慮されない。実証研究と理論では評価方法はまったく違うし、単著の刊行が昇進の基準になったりすると、もうどうにもならないくらいいい加減になる。

要するに大学では研究も教育も効率や費用対効果で評価す

ることなど到底不可能なのだ。さらにいえば、成果がすぐに出なくても、また失敗に終わっても、それを低く評価することも間違いだ。失敗がひらめきを呼び、よい成果に結実することも多いからだ。それは社会科学でも同じことだ。

このような条件が与えられてよい成果が出るからこそ、大学の自治や学問の自由が必要とされ、今日まで社会によって支持されてきたのではないだろうか。失敗やすぐには成果が出ない仕事が認められる制度がなくなったら、よい研究は生まれないだろう。

業績主義の発生の地である関西で大学教員をはじめたのだから、苦勞のつきない毎日だった。しかし、今の業績主義に比べると、私が研究業績というおぞましい表現に恐怖した日々はまだ牧歌的であったように思う。学会的表現法、学会的基準を

会得し、経済学博士の学位を取得すれば、なにがしかの自由を手にできた。私はそれによって大学の中でかろうじて生き延びられた。

ところが今は違う。現在進められている評価を伴う成果主義は、研究を、さらには大学そのものをも窒息させる。このことはすでに顕著になっている。研究成果の偽装や盗作の事件が増え、変節が日常化していることに示されるように、学者の良心を麻痺させ、腐敗の気配さえ感じさせる。この状況をどうしたら抑えられるのか、大学の内外で真摯な議論が展開されることを望む。

2 教養とは何か

教養という言葉に悩まされ続けてきた。

田舎出の私には教養がない、あるいは学究たるために必要な素養を欠いていると実感させられることはたびたびだった。それらの言葉の意味を考えているうちに、肝心の教養、素養という言葉が消えてしまった。それに代わって流行しはじめたのが「知」や「・・・力」なる表現だ。社会に内在的な連帯の仕組

みが解体され、ばらばらにされた個人の力能の差異に注目されるようになったのである。しかもその力能は資格や検定で測定されるかのような状況を生み出している。大学はダブルスクールと化し、学生たちは本来の大学教育よりも可能な限り多くの資格を取得するために狂奔する。その結果、この分野の業者たちの格好の餌食となりはてるのだ。

見過ごせないのはこの傾向に合わせて、脳科学者と称する評論家がばつこしはじめていることだ。個人の力能の違いを脳の構造に還元する風潮すら生みだし始めている。

これらの動きは、国家権力と企業によって積極的に利用され始めている。いわゆる格差問題である。個人的力能があると認定されるものは拾い上げられ、残りはドロップアウトさせられる。非正規雇用に呻吟する若者たちにはおまえたたちの力のな

さのためだと宣告される。

教養とはかつては選ばれたものたちの特権であった。しかもそれは支配階級のために選ばれたものたちの特権であり、その集団や階層が持つべき知的獲得物の集積であり、生活態度でもあった。

大学の歴史や思想史から明らかかなように、そこからは左翼的なもの、急進的なものは排除された。私の学生時代には左翼であると言うことだけで、大学のギルド的養成システムから排除されることもあった。大学教師への夢を諦めざるを得なかったK・マルクスの例を想起するまでもなく、戦後アメリカのマツカーシズム、戦後日本のレッドパージが大学史、思想史にその証しとして隠れもなく記録されている。

社会全体の知的、教養的水準はおろか、勝利したという資

本主義のリーダーたち、またその幹部候補生たちの資質低下は目に余る。ろくに演説もできず、演説原稿も書けない政治家たち、あとを絶たない汚職、官僚たちの無能ぶりをみるにつけ、教養を標榜した教育を破壊し、大学を専門性重視の高等教育機関に作り替えた教育政策の結末を思わざるをえない。

二〇〇九年二月二日に経済同友会は「一八歳までに社会人としての基礎を学ぶ―大切な将来世代の育成に向けて 中等教育、大学への期待と企業がなすべきこと―」を発表した。これを読むと、思わず笑いがこみ上げてくる。大学における教養課程を打ち壊して専門教育中心に作り替えた連中が今度は教養の再興を目指すというのだから。

かつて支配的だった特権的教養観は今では通用しない。保守的支配層が固執する排他的愛国主義も、どれほど声高に主張

しても今の時代に世界で通用するはずがない。特権的で対立的な教養とは区別された普遍的教養と生活態度が求められる時代なのだ。

求められている「教養」と生活態度はどのようなものか。第一に、地球環境問題、世界平和、人口爆発と貧困等の地球的問題群への理解と日常の実践である。第二に、地球上のあらゆる文化との対話の態度である。第三に、地球市民として思考し行動する態度である。この三つの原則が大学教育だけでなく、基礎学力の理念として保持されるべきであろう。

3 学びをめぐる相克はガリレイの屈服に 始まった

― B・ブレヒト『ガリレイの生涯』を讃えて―

なぜいま私はガリレイに関心を持つのか。

学者はいまかつてない深刻な状況に置かれている。現代には異端審問官も宗教裁判もないし、その学説によって肉体的に抹殺されたり、抹殺の脅迫を受けたりすることもない。それな

りに権利と自由が保障されている国に限ったことであることはもちろんだが。しかし、九・一一以降、学問の自由をめぐる状況は激変した。「テロリスト」や「ならず者国家」を攻撃する態度表明が踏み絵とされ、金縛りにでもあったように多くの人びとが沈黙を強いられている。産官学協同や民営化が自明のこととされ、利益を生みそうもないと評価される研究は窒息状態に追いやられている。

日本では最近の歴史の歪曲の度が過ぎた歴史認識と国益主義の横行によって加速し、学者の間では魂を売ることを恥じない風潮が横行している。研究に自由に関わって「魂」がある前提してのことだが。「魂」のない人びとには、私のこの議論ははじめから無用で意味のないことだろう。

ガリレイの屈服は、現代科学の状況の原点ではないのか。

現代の状況を解く重要な鍵となるのではないか。それ以上に学者のあり方を考える鍵となるのではないか。

現代科学の先駆者としてのガリレイの屈服と人間的苦悩について私が考えるきっかけとなったのは、ベルトルト・ブレヒトの代表作『ガリレイの生涯』であった。

この作品は一九三八／三九年に亡命先のデンマークで書き上げられたもので、時代変革への思い、ドイツの政治状況、原爆開発に対する学者の協力に対する批判やほのめかしがちりばめられ、そのことがこの戯曲に対する過ぎた政治的理解を生み出してきたように思われる。ブレヒトのこの芝居を観たのは、記憶はあいまいなのだが、大学院学生の頃ではなかったか。俳優座の公演だったと思う。

私のその頃の学問認識や政治姿勢を反映してか、ガリレイ

が法王庁に召喚され、屈服して地動説を撤回する過程ばかりが印象に残り、学者に対する権力の圧迫の象徴的事件として、私は理解した。ガリレイの屈服は真理をまもるための偽装であり、彼は私にとって讃えられるべき英雄であった。

一九九八年、ブレヒトの生誕一〇〇年の記念の年、ベルリンでベルリナー・アンサンブルによる上演を観た。ソ連・東欧社会主義の崩壊もあつて政治主義的理解は影を潜めていた。観劇を機にあらためて読み直してみても、私は完全に読み違えていたことに気がついた。

強く印象づけられたのは、そこにあざやかに学者がたどる生涯が典型として示されていたことだ。まぶしいほどに光り輝く精力的な四〇代のガリレイと地動説撤回後の晩年の老いの姿の対比、そして寂寞とした心的状況は、この芝居が問いかける

現代学者論について考える以前に、一人の学者の生涯として胸打たれるものがあつた。

この作品の中で、ガリレイは実験と観察に夢中になり、科学の将来を大衆に熱っぽく語る一方で、きわめて世俗的な学者として登場する。自分の給料の交渉をし、パトロンが求める実務に役立つ設計や計算もし、どこでも手にはいるような望遠鏡をパトロンに献呈して機嫌をとる。娘に嫁入り道具の一つも買ってやりたい、物理学の本だけでなく他の本も沢山買いたい、いい食事もしたいのだと、彼は待遇の改善を求める。おいしいものを食べられる待遇が欲しいという（「おいしい食事の時間が一番よい考えが浮かぶ」という台詞に感じ入り、愚かにもこれを人生訓としたために、私は多くの病を得た）。

かつて大学が「象牙の塔」としてあがめられ、特別視され

た時代があつた。学者たちのいささか非常識な奇行も尊敬ゆえに見過ごされた時代もあつた。「象牙の塔」に生活するがゆえにストイックな科学への献身が求められたこともあつた。その名残りはまだ社会の至る処に残っており、時として内外からいわれのない非難の対象となつている。

現代の学者にストイックな希求を求めても意味のないことなのだが、ガリレイの生活に示される世俗性こそ学者の人間としての、社会の構成員としての連帯感と信頼関係の基礎ではないだろうか。

ガリレイの登場の意義は何か。実験や観察の結果を率直に表現することが権威や権力に対する脅威になる時代に入りつつあつた、彼はまさにその時代の象徴であつた。哲学から実験科学へ、そのことの意義を彼は明確に自覚していた。コペルニク

スやブルーノとの決定的な違いはそこにあつた。コペルニクスたちは法王庁の教義理解や解釈権への挑戦として抹殺されるか禁書の扱いを受けた。

それに対し実験や観察はそれ自体が大衆との連帯を実現できざる基礎であつた。運動の法則は誰にでも体験でき理解できた、天体も望遠鏡で覗けばその運行について経験的に理解できた。それだけに近代科学は誰に独占されるものでもない連帯性を基盤にした科学に発展する可能性を秘めていた。それだけに知識とその解釈の独占を保持しようとする支配層にとって大きな脅威ではなかつたのか。それだけにガリレイの屈服はまぎれもない裏切りであつた。

法王庁の監視下で生きる師に敬意を表するため訪ねて来たかつての愛弟子アンドレアは、ガリレイが『新科学対話』を

ひそかに書き進め完成していたことを知り驚愕する。師の屈服は見せかけで、自分の学説をまもるための巧みな戦略であり、新しい研究倫理の実践だったのでと、師に対する評価を変えらる。アンドレアに対しガリレイは、屈服したのは拷問が怖かったからだ、肉体的苦痛が怖かったからだと答える。屈服は計画的なものではなかったと答える。自分は科学に対する「裏切り者」であることには変わりはないといいきるのだ。学者としての「見栄」が原稿を隠滅することをためらわせたのだと述懐する。

それにもかかわらずガリレオが屈服の過去への悔恨の念をにじませながら、自分が挫折によって学んだ教訓を愛弟子に伝えるくだりを、私は涙なしに読むことができない。アンドレアはすでに学者として自立し、ガリレイがかかって求めたものとは

まったく異質の学者として生きている。あらためて師の学問論、学者観に傾倒することなどあり得ないように思われる。それでもなお語らなければならぬという、内面の葛藤に心打たれるのだ。

私、さらには私と同世代の人の多くは、それがいかに挫折と誤謬にまみれた体験であったとしても、戦争反対、安保闘争、大学の自治と学問の自由をまもる運動は学者の人類的責務であると考えていた。いささか時代がかった表現だが、それが学者の「魂」であると考えていた。

その体験がこれほどまでに完璧に継承されず、学会や個別担当科目に逃げ込み、産官学協同は科学研究のうちだとうそぶくやからばかりが多くなってしまうのだろうか。

あらゆる研究は普遍的で人類的なものであるはずなのに、

なぜ科学の名において矮小化され、特定の利益集団や短期的視野の利害に奉仕する試みが横行するのだろうか。

ブレヒトはガリレイを通して、科学の目的は人類が生きてゆく労苦を軽減することだと断言する。今は言われると何でもする小才のきいたやからが輩出し、人類の労苦の軽減とは正反對の結果を生み出しかねない研究が進んでいると警告する。アンドレアからはこれに明確な答えは返ってこない。彼はすでに師とはまったく違った学問世界に生きているのだから当然といえば当然であった。

今の時代にブレヒトのように主張するならば、若い学者からは老人の繰り言として片付けられ、「ださい」と無視されるだろう。しかし、ブレヒトがああの時代に流れに抗して書いたことは正しかったし、いまの時代にもこのテーマは至る処で語ら

れなければならぬと思う。

ブレヒトは讃えられてあれ。この時代に人は彼からあらためて何を学ぶのだろうか。

II

学者の社会的責任、大学の社会的責任

―東北大災害と学者たち―

1 学者の社会的責任、大学の社会的責任

―三・一一追悼の日を迎えて―

あの大災厄からもう一年が経過したというのに、私の暗澹たる気持はいまだに晴れない。

政治の混迷と政治家たちのていたらく、企業経営者にみる社会的責任の欠落、そして支援とか絆とかいいながらその実、売名をはかるかのような行為に終始するやからが横行している

実情を見ると、気分はますますふさいでくる。一瞬にして家族と財産を失い、放射能汚染におののく人びとの心情を思い、それに寄り添う共感の態度こそが求められているというのに、「復興」と「支援」の声には傲慢さがひそんでいるように感じられてならないのだ。

大災厄は学者と大学のあり方を考えさせる機会にもなったように思われる。メディアにさかんに登場して原発大災害を解説する原子炉工学専門の教授たちの態度に憤激したのは私だけではあるまい。私の世代に用いられた言葉を使えば、「御用学者」ばかりであった。彼らは大学で学生たちになお「原発の安全性」を以前と同じ様な調子で論じ続けているのだろうか。国際学会では彼らはどのような振る舞っているのだろうか。

彼らはおそらく時流に何のためらいもなく身を任せ、それ

が自分たちの使命だと考えて主張し、行動してきたのだと思う。原子力発電に反対する人たちの意見を無視し、あるときは嘲笑してきた。研究費を出してくれる企業への忠誠こそが彼らの行動規範であった。だからこそ「安全性神話」を何のためらいもなく宣伝したのだと思う。大災厄を前にして彼らはこれまでをどのように自省しているのだろうか。国民の安全、人類の安全を守る態度に転換したのだろうか。それとも反原発のうねりがいずれ沈静化することを期待して息を潜めているのだろうか。

地震学者たちの態度も同じようなものだ。すぐには実現するはずもない地震予知技術の開発に向けた膨大な国家予算の支出に寄生するだけで、国民の安全のためという姿勢を貫いて研究していたとはとうてい思われない。「想定外」「予想外」という表現は、彼らの免罪符には決してならない。

このような無責任な縄張意識で予算を独占してきた仕組みを抱えている大学や学会は今後どのように姿勢を正していこうとしているのだろうか。

学者の主流に見られる無責任な態度を観察していて、私はマンハッタン計画に始まる核爆弾開発に対する学者たちの関わり方を思い出している。ナチス・ドイツの原爆開発が近いという虚偽情報を操作して、アメリカはユダヤ系の物理学者たちを巧みにこの計画に誘い込んだ。

ドイツの敗北によつてこの悪魔の軍事技術の開発は無用となったはずだから、即刻封印されるべきであった。それなのに開発は継続され、こともあろうに核開発には無縁の日本に最初の原子爆弾が投下されたのである。原子爆弾に始まって次は動力として軍事的に利用され始め、原子力潜水艦、原子力航空母

艦の技術に展開されていく。原子力発電にみる「平和利用」とは実質は軍事技術の転用でしかなかった。

この過程で多くの学者たちと大学は産軍複合体に巻き込まれていったが、指導的学者の何人かは核兵器開発に道を開き自らもそれに参画したことを悔い、今後の研究のために倫理的規範を示そうとしたのであった。開発を推進したA・アインシュタイン、H・オツペンハイマー等の後悔、ラッセル・アインシュタイン声明、ドイツの原爆開発に関わった学者たちによるゲッティングゲン宣言等、学者たちの宣言が続いた。

そのことによつて学問と大学の持つべき批判的精神はかろうじて救われ維持されたのである。彼らの活動の高い倫理性によつて大学を構成する多くの人びとの自治と自由を求めた闘いは励まされたのである。私はこれまでその倫理性の継承をめざ

して努力してきたつもりでいる。

このような歴史の教訓に照らして、いま学者たちに求められていることは何だろうか。悪魔的な技術に対する批判的態度を明確に表明することではないか。原発をめぐる世界の状況を見ていると、いまこそ決断すべき歴史的転機であることは明らかだ。いまこそ高い倫理性を示すべき時である。先達の勇氣ある行動に倣うべき時である。そのような気骨ある、社会的責任を自覚した学者たちが輩出することを望む。

大学や学会にはそのような批判的精神に満ちた学者たちを世に充満するデマや罵詈雑言から守る役目が求められるだろう。そのためには、大学は組織としてその社会的責任を明確にすべきと思う。現代は営利企業でさえその社会的責任を問われる時代である。大学だけが例外でありうるはずがない。大学が

研究費集めに狂奔し、産学協同を自明のこととして経営される現状は再検討されなければならぬ。

本来大学には人類から付託された責務がある。地域住民や国民に限定されずに、つねに地球的視野で考えることが求められている。原子力発電やエネルギー問題についても、自然災害や防災についても、その視野で対応することが求められている。そのことを自覚もせず、卑近な企業的利益に奉仕する組織に終始するならば、大学は並みの研究機関、並みの教育機関でしかなくなる。このままではこの国の大学は滅びの瀬戸際に立ち至るといつてよいだろう。

2 学者たちに社会的責任を自覚させるにはどうしたら

よいか ―池内了氏の意見を読んで考えたこと―

東北大災厄を契機にこの国の多くの病巣がえぐり出された。政治の混迷、企業経営者の社会的責任の欠落の状況には言うべき言葉もない。同時に、大学と学者たちの無責任ぶりにもこの国の大学と科学研究の危機を痛感せずにはおられない。病巣を取り除く抜本的な手術が必要なのに、その方策も見いだせ

ずにいる。実際のところは、病にかかっていることさえわからない状況ではないのか。

そんなことを考えているときに、『日本経済新聞』二〇一二年三月一〇日付紙面に「科学者と社会―池内了さんに聞く―」と題する長大な記事がのった。対談の形式ではあるが学者の社会的責任の問題を真正面から取り上げた編集委員の清水正巳氏には敬意を表したと思う。清水氏は、東北大災害によって学者、技術者に対する信頼は失われた、それについて反省の言葉は聞かれはするが、科学者の社会的責任の問題はなおくすぶっているとする。しかし率直に言えば、私にはその「反省の声」さえ聞こえてこないのだ。

そのよい例を一つあげておこう。日本学術会議は学者を代表する機関という。かつては確かにそうだった。有権者の投票

によつて選出された会員によつて構成され、学者の議会のようなものだった。それが政治の圧力によつて今日あるような、あつてもなくてもよいような機関に作り替えられてしまつたのである。この組織はいつたい何を考へて行動しているのか、ホームページを覗いてみたところ、二〇一二年一月の大西誠会長の「会長からのメッセージ」を発見した。そこから少し引用しておこう。

「昨年三月に起こつた東日本大震災による津波災害と原子力発電所事故によつて大きな被害が出たことは、この現代科学の不完全さをえぐり出すとともに、不完全な科学を応用利用することに関わる現代科学者の悩みをも露わにしたといえます。日本学術会議もこの問題からは無縁ではなく、国土

や都市を構成するのに利用されてきた科学的知見のどこに脆弱性があったのか、原子力発電技術の不完全さとそれを応用するに際して慎重さへの認識がなぜ不足していたのか等を自問しつつ、・・・」

この文章には「反省」という表現すらみられない。災害によつて「不完全さ」がえぐり出され、「不完全」なものを応用することへの科学者の「悩み」をも露わにした、「不完全」なものを用いる際の「慎重さ」に欠けていたとか曖昧な表現に終始し、社会的責任の自覚などみじんも感じとられない。科学的認識は不完全で相対的なものだと言うことは、学者には自明のことではなかったのか。これが学者たちの態度の最大公約数的な表現であるというなら、情けないを通り越してあきれかえ

ったというほかはない。

日本学術会議会長の態度を長々と引用したのは、池内氏の主張と対比させ、それを手掛かりに学者の社会的責任のあり方を考えてみたいからである。うやむやにせず、くすぶっている火を燃えさからせたいからである。池内氏の意見はいまの風潮の中ではおそらく少数意見であろう。このような声をもっと大きくしなければならぬのではないか。

彼の意見には大筋で賛成であるが、挑戦的であるためには、もっと具体的に批判して対案を示して欲しい。そういう視点から、彼の問題提起を私の論理ですこし補強してみたいと思う。

池内氏はまず、学者は政府やスポンサーの方ばかり向いて、市民の方を向いてこなかった、市民に対して科学の成果のマイナス面も含めて率直に語ってこなかったと主張する。その通り

である。

そもそも大学とは、市民の側からの付託と信頼によって成り立っていたのに、そのことはすっかり忘れられてしまったようだ。大学は市民の信頼と尊敬の念によって支えられてきた。何を研究しているのかわからなくても、市民は大学とその構成員は間違った研究はしないものと信頼していたのである。そのような信頼関係はとつくに消滅している。消滅の責任は学者と大学の側にある。市民の側の評価や批判を考慮にいれることなく組織の論理が一人歩きし始めたのである。

学者がパトロンに尻尾を振るかのような態度は最近の国立大学の法人化を契機に見るに堪えない状況になっている。いかに外部から資金を調達するかがその大学が国内での競争に勝ち抜くために重要な条件とされ、いきおい資金を獲得する縁故の

ある教員の発言権が大きくなる。教員の評価にあたって、大学の外での社会貢献が重要項目となり、政府や自治体の審議会の委員をやっている教員は当然評価が高くなる仕組みになってしまう。

このような状態では学者が市民の側に立つなどというのは希有の事であることは明らかだ。市民のために活動するなど変わり者のすること、彼らが大学の中で主流になることなどいまの状況ではあり得ないことだろう。

成果のマイナス面を学者は率直に語ってこなかったと池内氏は言う。科学者がそのように振る舞うならば、今の制度の下では彼らは確実に葬り去られるだろう。必要なことは、研究成果に関する情報開示と大学の内外からの批判の自由を制度的に保証することだ。そのために大学の制度を大きく変えることが

必要である。

残念ながら、経済成長至上主義に巻き込まれパトロンへの忠誠を誓う主流の科学者が自己改革に足を踏み出すことなど、現状ではまず考えられない。結局は今まで以上に生態系に被害を及ぼしかねない「研究成果」を何の制約もなしに放出し続けることになる。

池内氏は学者は「傲慢」になっていると指摘し、原因は細分化された専門性にあるとする。確かにその通り。細分化された学会で第一人者を気取るやからを、私もうんざりするほど見てきた。細分化すればするほど「権威」や「第一人者」が増えることになる。

しかし、「傲慢」の原因はそれだけではない。政治権力や研究費を提供するパトロンとの緊密な関係が「権威」を自他共

に認めるやからの立場を強くしている。

学者は自分の力で、自分の頭の良さや能力によって自分
光っているとは勘違いしているのではないか。あってもなくても
いいような研究が維持されているのは、大学に対する市民の信
頼によってであることが忘れ去られている。学者は初心に返っ
て市民や社会との本来あるべき関係を回復して謙虚でなければ
ならないと思う。

最後に、池内氏は若手研究者に学者の社会的責任を教える
ことが重要だとする。しかし、社会的責任とは何か、古手はお
いておいて、若手研究者に限って教えると言うことはどういう
意味なのか、それこそが問題ではないのか。

学者個人が負うべき社会的責任を考えなければならぬこと
はいうまでもないが、それとあわせて組織としての大学が負う

べき社会的責任も確認されなければならない。営利企業でさえ、またその経営者でさえ企業の社会的責任の遵守を社会から求められている時代なのだから。

最近の相次ぐ日本企業内部での経営者のスキャンダルは世界の注目を集めている。どうしてこんな愚にもつかないことが起こるのだろうか。社会的責任の意味が日本ではまだ十分に理解されていないからだろう。さらにいえば、経営者たちは負うべき責任について学生時代も含めて学んだことはなかったからではないのか。

このことはそっくりそのまま大学と学者についても当てはまる。法令遵守、情報開示、説明責任等、企業に課せられる責任概念は大学でも最低限遵守されるべき責任として自覚され、制度化されなければならぬ。その上で、学者個人に固着した

責任概念の確立が求められるのではないか。

医師の世界では、倫理性の規範としていわゆる「ヒポクラテスの誓い」がある。医学の世界では生命を扱うことから倫理的制約がある程度制度化されている。倫理的規範が医学部でどのように教育されているのか、違反に対する処罰が医師会や学会によってどの程度まで具体化されているかについては、私は詳しくは知らないが、とにかく規範が存在することだけは確かである。

ところが、学者全体についてはそれに類する規範は存在しない。原子力発電も生命に関わる技術だというのにである。

大学の自治、学問の自由という普遍的規範は、権力との長い闘争の歴史の中で獲得された。日本の場合でも同様だ。戦前の治安維持法による学者への弾圧を考えてみたらよい。大学の

自治と学問の自由は多くの先達の犠牲によってはじめて得られたものだ。

それらの歴史的体験と教訓の集積がすべて忘れ去られ、私の世代までは自明のことと思われていた規範がすでに消失しているのあるならば、私はあえて言いたい。もう一度科学の歴史を、日本の大学自治をめぐる歴史を謙虚に学んでほしいと。

最後にもう一つ強調しておきたいことがある。地球環境危機を初めとする全地球的課題が深刻になっている今、地域住民や国民に限定されずに地球的視野で研究することが学者には求められている。その責任を自覚せずに卑近な利益への奉仕に走るのならば、この国の大学も学術研究も確実に衰滅する。

Ⅲ

連帯の人間科学をめざして

ーグローバル資本主義に抗してー

グローバル化の時代に経済学に求められるものは何か。

危機の深刻さがさまざまな分野で論議されてはいるが、その解決策となると明確な答えはどこにも示されていない。答えはおろか、危機の全体像すら示されていないように思われる。

グローバル資本主義の最大の特徴である投機による利得を例にとってみよう。この投機の構造を破砕しない限り「格差社会」などなくなりはない。アメリカやヨーロッパの若者たちが果敢に戦いを挑んではいるが、残念ながら富裕層が投機のために所有する莫大な資金を収奪することなどおよそ不可能であろう。

投機の抑制のために、またぞろトービン税導入が議論されはじめている。しかしこの施策として増収を増やすために有効で

はあつても、過剰資金を回収する手段とは到底なりえない。批判を回避するために政治家たちが仕掛けた目くらましでしかない。トービン税は地球的規模で一斉に採用されない限り、資本の逃避を生み出すだけだ。しかも今の力関係では、アメリカ、イギリス、スイス等の金融的利得の巨大な国々がこの地球大的合意に参加するはずがない。それが実現できるくらいなら、温室効果ガス削減の国際合意などとつくに実現しているはずではないか。

既存の理論的枠組み、既存の理念にしがみついているのは、もはや展望はない。新たな理念的、理論的転換が求められているのではないか。しかも転換が求められているのは、経済学をはじめとする社会科学だけではない。その基礎にある人間観について、転機にある。人間とは自身の生存のために生死を賭け

て闘い合うものであるとする人間観はこの際捨てなければならぬ。この小さな地球の上で今のように個人から民族、国家にいたるまで激しく争い、殺し合う事態をやめない限り、人類に未来はない。「ともに豊かになる経済」を構築するための理論と施策こそが追求されなければならない。これが私のこれからの仕事のライトモチーフである。

暴走する制御不能のモンスター

グローバル資本主義という奇怪なモンスターが暴走している。二〇〇八年秋のリーマン・ショックに始まった世界恐慌を

目の当たりにして、先進諸国はこの暴走を制御できずに大混乱に陥っている。そのためか、「一〇〇年に一度」「未曾有の」等、情緒的な表現がメディア上に踊る。制御に手こずっていることを自ら認めているようなものではないか。

しかし人類が体験しているのは、過去に例のない特徴と規模の新たな地球大的危機であり、社会主義の失敗に力を得て市場原理主義に依拠して地球規模に拡大したグローバル資本主義の危機であることに思いいたるべきであろう。

資本主義的市場経済は地球規模に拡大し、人類が育んできた多様な経済制度と生活原理がグローバル資本主義の大波に巻き込まれている。その大波が人類に平等な豊かさや安定をもたらすものではないことを理解することはそれほど難しいことではない。

社会主義の影響の下でともかくも維持されてきた国家を媒介にした所得再分配の制度を破壊し、無制約にも等しい競争に世界中の市民を投げ出し、とたんの苦しみを味あわせているからだ。それに加えて投機性の極限までの発展が重くのしかかっている。労働の成果をかすめ取り、なけなしの蓄えを収奪する仕組みが出来上がっている。

危機の引き金をひいたのもその極限にまで成長した投機の瓦解であった。投機によるバブルが過剰な投資を呼び、新興国との競争の激化によって顕在化するはずの設備過剰は金融資産の見せかけの拡大によって隠蔽され、自覚されることなく拡大は続いた。見せかけの拡大を豊かさとして錯覚したのである。まったく新しい形の深刻な信用・金融恐慌が突発的に発生したのである。

この危機は新しい金融商品創造技術が作り出したものだと主張される。しかしよく考えてみよう。資本主義そのものが投機的な経済である。資本蓄積には一定の貨幣の集積が前提になる。お金を動かさなければ企業も工場も作れない。そのために信用制度と証券市場が資本主義の発展と共に、あるいはその前提として誕生したのである。株式会社の普及はこの市場の独自性を高めた。証券市場は独占資本主義の時代に入ると、独占利潤の増大にもなう投資資金の増大によってその規模を拡大していったのである。

ところがグローバル資本主義の投機性は、資本主義本来の投機性も共有しながら、これまでと大きく違う点がある。

第一に、世界中から過剰資金が集められ、投機が地球大的に制度化されている。中国がため込んだ外貨準備も、アラブ産

油国のオイルマネーもつぎ込まれ、家庭の主婦たちのへそくりさえもが投入される。

第二に、投機はあらゆる部門をとらえ、金、石油、非鉄金属等の原材料市場、農産物先物市場、不動産市場も投機の舞台である。投機資金はより高い利得を求めて自由に動き回る仕組みが出来上がっている。

第三に、投機は小国をも巻き込み、危機を深刻なものにしている。

あらゆる分野、あらゆる国が世界的規模で投機に深く取り込まれた寄生的な制度が誕生し、その危機をいま体験しているのだ。かつてJ・A・ホブソン、R・ヒルファアーディング、レオンらが論じた金融的利得によって独占利潤を獲得する金融資本の蓄積様式は全地球を覆う制度として君臨するにいたつ

た。この巨大な寄生的な構造に対抗する道はあるのだろうか。

このシステムの厄介なところは、既存の信用制度が投機の主体として登場したことだ。そのため投機の破綻は信用全体の収縮をもたらし、恐慌を深刻なものにしている。規制は本来の信用制度を収縮させ、資本蓄積を萎縮させかねない。過剰資金の投機的運用の監視と規制を目論むG20が統一して施策を実施しても、成功する見通しは容易なものではないだろう。

この危機によってグローバル資本主義の矛盾の深刻さが露呈されているが、その核にあるのが中国である。中国が「社会主義」を標榜する特異な資本主義、特異な帝国主義への道に踏み出し、その過程が速まったことは、資本主義世界にさまざまな影響をおよぼしている。勢力範囲、資源独占、資金循環だけでなく、人権抑圧の傾向を広め、グローバルな低賃金への流れ

を速めている。

自らの内部の民族的権利を蹂躪する国が対等な共存を目指す世界的制度の実現を目指すはずがない。この奇怪な中国資本主義への依存が広まり、今ではその外貨準備と広大な市場にアメリカさえもひれ伏している。中国の台頭が自然破壊と地球環境危機を促進していることも見落とせない。汚染物質の大量排出に止まらず、その資源独占への狂奔が自然破壊的投機を促進しているからだ。

危機が深まる中で「連帯」や「共生」の理念を代表すべき勢力から提示される施策は、せいぜいのところ「セイフティネット」を張ることにすぎない。確かにこれは心地よい表現ではあるが、所得格差の地球規模での拡大、絶対的貧困階層の増大に対応できる有効なネットなどあるはずがない。この程度のネ

ットではモンスターを制御できるはずがない。

もはや市場の内部に抵抗の主体を求めることは不可能にみえる。システムを変えることが求められているのに、なにをどこから始めたらいいのかわからずに門口で迷い続けている。

このままいけば、投機的資本主義が再興するだけでなく、自然破壊、人権抑圧、収奪強化の体制が拡大再生産されることは目に見えている。この流れを抗することなく放置してよいものだろうか。地球大的寄生性に対抗する新しい理念を模索しなければならぬのではないか。

模索の道すじはまだ見えてはいないが、どのような抵抗軸が可能なのか。いくつかの命題を示して議論の材料を提供してみよう。

連帯の経済をめざして

「経済」とは何だろうか。貨幣的利得の最大化をめざして他を押しつけて競争することが「経済」だと理解する態度はとつくに破綻している。「経済」とは貨幣表現される市場的關係の総体であるという通説、その外にあるものは未開の非文明的關係であり、先進国が実現した市場的關係に進むことが進歩であるとする主張ははたして正しいものだろうか、再検討しなければならぬ。

GDPや貿易額という基準で測定すると、貨幣で表現される世界市場のほとんどは先進国といくつかの新興国によって占

められる。世界人口の圧倒的部分を占めるのに、全世界GDPのわずかを占めているにすぎない非先進世界は経済的にはまったく無意味な世界となる。せいぜいのところ、先進国型開発を受容する部分に限って、その開発に限って存在意義を認められているにすぎない。これでは市場的關係が世界をとらえきったとはいえないのではないか。

経済活動を円滑に維持することは人類の歴史と共に古い課題であった。たとえば古代王権の最重要政策は、貨幣制度と度量衡制度を統一することで交易や通商を発展させることであった。記述された経済学はアリストテレスの政治学、経済学、倫理学の体系的記述に始まって、ヨーロッパの学の体系の中心にあった。それはアジア世界やイスラム世界の思想についても言えることであろう。世界宗教の登場によって経済活動を宗教倫

理とどのように合致させるかは、支配者の重要な課題であった。市場こそが、市場だけが「経済」とする世俗的理解が普及したのはごく最近のことであり、人類の経済活動の長い歴史からみると、時間的に見てきわめて短く限定的なものと言わざるをえない。

人類の知的先達が解明しようとした「経済」の普遍的定義を問われれば、私はちゆうちよなく「共に豊かになる」仕組みであると答えたい。地球環境問題を考えてみよう。世界の資源のほとんどは先進国といくつかの新興国によつて占有され消費されている。このままいけば、他の国々や将来世代には何も残されない。「共に豊かになる」「将来世代にも豊かさを残す」という理念によつて突き動かされる「市場経済」などあつたためしがない。「持続可能な発展」はどのような時代でも前提さ

れるべき規範的枠組みだったのではないか。

現実を突きつけられて、ようやく「経済成長と環境問題の両立」と言い出したが、成長か環境かという選択は明らかに間違っている。これが「市場経済」とその担い手たちの理念なのだ。それは「共に豊かになる」という普遍的理念からはほど遠い。

地球上には実に多様な経済がある。人権が尊重されるべきものがあるなら、それらの経済の存在も同じように尊重されなければならぬ。これこそが地球大という視点で考えるときに前提とされるべき枠組みである。優勝劣敗ではなく「共に豊かになる」原理を明らかにすることが求められているのではないか。

経済学の父として畏敬されるA・スミスは、『諸国民の富』の刊行に先立って一七五九年に著した『道徳感情論』の論述を

「同感」の解明から始めている。

「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、あきらかにかれの本性のなかには、いくつかの原理があつて、それらは、かれに他のひとびとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸福を、それを見るところという快樂のほかはなにも、かれはそれからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であつて、それはわれわれが他の人びとの悲惨を見たり、たいへんいきいきと心にえがかせられたりするとき、それにたいして感じる情動である。われわれがしばしば、他の人びとの悲しみから、悲しみをひきだすということは、それを証明するのになにも例をあげる必要がないほど、明白である。すな

わち、この感情は、人間本性の他のすべての本源的情念と同様に、けっして有徳で人道的な人にかぎられているのではなく、ただそういう人びとは、おそらく、もつともするどい感受性をもって、それを感じるであろう。最大の悪人、社会の諸法のもつとも無情な侵犯者さえも、まったくそれをもたないことはない。」(A・スミス著、水田洋訳『道徳感情論』(上)、岩波文庫、二〇〇三年二月、二四―二五ページ)

人間をどのように利己的なものと想定しようと、人間には内在的に相手の状況に同感する感情があると、スミスは主張する。「利己的」という規範が市場経済の主役である経済人の規範と理解されるのが通例だが、私は「同感」こそが人間存在の根源にかかわる共通の経済規範であると理解したい。スミスに

とつて市場経済の研究課題は人間関係を律する社会規範の解明であった。彼が言う「利己主義」、あるいは『諸国民の富』で明らかにした市場経済原理は、人間としての連帯を基盤にしたものだったのではないか。

ところがスミスの原理は自由放任主義とされ、利己心に経済を委ねれば、「見えざる手」によつて効率的、合理的解決がはかられると理解されてきた。利己心は類的共感を基盤にしているとか、相手を打ち負かす競争で相手を哀れむなどと、市場経済の担い手たちは考えだにできなかった。スミスの態度は捨てさられ、ひたすら市場経済の純化だけが追求されたのである。「同感」も「連帯」も消えてしまった。

グローバル資本主義の規範と枠組みはもはや「共に豊かになる」、共感するという類的連帯とは無縁のものになっている。

それを復活させなければならぬ。「経済」の作り替え以外に道はない。

労働と市場をとらえ直す

「連帯」の規範の復活のためには、労働についての従来の考え方も再検討しなければならない。

美しさや古典的価値を尊重しよう、自然や景観を楽しもうという人間的本性、生物多様性を維持しあらゆる生物種との共存を模索しようという人間の態度は、貨幣的に表現される市場の原理には反映されていない。それらの人間的本性が市場に登場するのは、価格がつけられる場合か、費用便益分析に無理矢理押し込められる場合だけである。労働の成果ではないものが偽りの価格を付与されて市場に登場する。本来社会的には役立つものと判断されないような労働も就業労働に編入され課税対象とされる。「市場経済」が取り込む労働のいびつさは明白で

ある。この状態が恒常化すると、人間性そのものに歪みが生まれる。本来無償の善意の労働に対して対価が要求されるようになる。人間的連帯は確実に衰退する。

人間の本性に反する市場の拡大の惨禍は、地球環境危機に如実に示される。現代の危機を乗り切って新しい原理に基づく社会をめざすには、効率優先の市場の内部に環境危機を認識させる装置を作ることが必要だが、そのためには市場の外に人間の本性に対応した経済的関係を回復させることが不可欠である。それなしには市場の倫理的水準を高めることはできない。K・マルクスが喝破したように、「蓄積せよ、蓄積せよ」、これが市場における至上命令なのだから。

市場に倫理性を反映させるためには、人間労働のあり方について再検討が必要だ。自身の筋力、知力を使って労働して人

間は生きている。労働は人間活動の基本である。社会的に役立つ労働とは市場経済の内部で社会的分業を構成する労働であり、それが職業、あるいは就業労働である。就業労働は人間労働の多様な形態を浸食し、本来無償であり自発的に行われた労働を対価を要求するものに作り替え、その傾向が先進国社会を覆い尽くすかのように進んでいる。

就業なしには生きられない。生活時間のほとんどを就業労働についやす状態をみると、社会科学が就業労働にしか注目せず、就業労働の外にある多様な労働形態を度外視してきたのは当然といえば当然であった。K・マルクスが『資本論』を著した時代はまさにそうであった。長時間労働は人間の持つ労働の多様な可能性を奪い去り、家事労働を非人間的なものにした。標準労働日を求める運動はまさしく人間性回復の運動だった。

た。だからこそ「イリイチは背後に追いやられた労働を」「シヤドウ・ワーク」という表現でとらえたのである。今ではこの概念を積極的な社会的意義を持つものにとらえ直す試みが定着し始めている。就業労働の外にあるさまざまな経済活動や社会活動が経済社会を維持していくのに不可欠なものであることは誰もが認めている。その労働形態を「市民的労働」と定義してみよう。

伝統的な地域活動に加えて、今日ではさまざまな分野でボランティア活動が活発になり、社会にはなくてはならない活動であることが認知されている。自然災害時での重要な役割はよく知られている。非営利の労働は経済の分野で日増しにその比重をたかめている。さまざま分野で金銭的取引や交換による経済活動が展開されている。ガレージセールやバザー、地域通貨

などがそうだ。地球環境問題や食の安全にかかわって、効率性や利便性だけに頼らない経済活動が注目されている。

市民的労働、すなわち市民の連帯感に基づいた労働による経済活動は、一見すると非効率的で無意味な行為にも見えるが、市場と経済を健全で持続可能なものにする要素をはらんでいゝる。市民的労働の比重が高い社会は健全で安定したものと言わなければならぬ。「豊かさ」は、就業労働が人間のすべての労働可能性を喰らい尽くすことによってもたらされるものではないのだ。

NPOへの就労が就業人口に占める比重が高まっている。この就業は「市民的労働」と就業労働の接点のところ、に位置づけられる。つまり、就業労働であっても、必ずしも営利的活動に含まれない部分が大きくなっているということだ。NPO労働

働の比重の高さも社会の「豊かさ」を計る重要な尺度であろう。

人間は生きてゆくためには多様な社会活動に関わることが必要である。それなのに、就業労働に取り込まれてボランティアやさまざまな地域活動をする時間的余裕が奪われてしまった。「市民的労働」の時間を取り戻すこと、それが労働時間短縮の目標の一つである。獲得した時間を遊びだけに費やすというのでは、真の人間性回復にはつながらない。回復すべきは連帯と協同の労働なのだ。

家庭を基盤にした労働の役割も無視できない。この労働形態は価値の低い従属的なものでは決してない。食事や育児、家庭を基盤とした生産や交換等の生存維持的労働に限定されず、消費過程やりサイクルの末端はこの労働形態が担っている。この労働に支えられてはじめてリサイクルは可能になり、資源循

環が完結する。現代を考える上で、家庭を基盤にした労働は消費活動をエコロジックに見直す上で重要な意味を持っている。

人間労働の多様性に対応して人間のいとなむ経済的關係も多様なものでなければならぬ。家族、家庭を基礎に展開される贈与、無償のサービスの相互の提供、その交換の地域的仕組みからなる地域的経済關係、安全性を重視した地域市場の発展、これらは本来、資本主義の発展と並んで人間社会に内在した経済關係であつた。

効率性重視の生活様式が定着するのにあわせて、それらは貨幣表現された市場に取り込まれていった。家庭で食事を作るよりも外食を選び、家庭内サービスも外部から有償で供与されるようになった。安全性に問題があつても低価格を選ぶ傾向が定着した。このように伝統的な経済關係が市場に取り込まれる

とGDPはその分だけ確実に押し上げられるために、豊かになったと錯覚したのである。

無制約に市場経済に身を委ねることがはたして「豊かさ」なのか、問い直さなければならぬ。あらゆる生活分野が市場経済の取り込まれたとき、恐慌や危機は人類を究極の貧困のどん底に突き落とす。市場経済の下ではさまざまな利害集団の連帯性は闘争と対立によって再配分で有利な地歩を確立しようとするもので、「豊かさ」を安定的に確保するものではない。市場の外にある経済活動に示される諸関係こそが連帯性の基盤なのだ。

以上の視点から見ると、GDP基準で「豊かさ」を測る態度は不毛としかいいようがない。それぞれの国の個性的な豊かさを計る視点が求められている。

経済の国民的特性を再構築する

グローバル資本主義の支配の拡大はそれぞれの民族や地域の文化的基礎を掘り崩し、深刻な対立や相克を生みだしている。それぞれの国民経済が持つ経済的特性をなくし、均質化、画一化が進んでいる。

この過程は今に始まったことではない。アメリカ経済に似せた画一化が戦後その一極支配の下で急速に進んだ。画一化は生産様式や経営手法に止まらず、生活様式そのものにまで及んだ。このことがアメリカの商品と資本の世界制覇を可能にする基盤となった。グローバル資本主義の下でその過程はさらに極限にまで押し進められた。多国籍企業の支配の拡大を推進し有機的資金の寄生的資本蓄積を推進する条件を整備しただけでな

く、リーマン・ショックにはじまる経済恐慌を急速に広く深く伝播する条件にもなった。

そういう中で、危機を契機に各国経済の国民的特性を強調し、その再生を求める主張も強まっている。とつくに忘れ去られた日本的経営への回帰の主張だけでなく、イスラム経営やイスラム金融に対する関心も示される。その主張はグローバル資本主義に抗するよりどころにもみえるが、ことはそれほど単純ではない。

かつて日本企業の成功が日本独自の経営手法にあるとされ、国内外の学者たちの間で日本的経営の特徴が論じられた時代があった。いわゆる「三種の神器」論議にはじまって日本的な集団主義の基礎がイエかムラかという論争にいたるまではなばなく議論された。日本の地域市場や生存維持経済で重要な

役割を果たしていたイエもムラも高度成長の過程でほとんど消滅していたが、多くの経営者たちはそのような日本の素養のなかで育ち教育されていたし、その頃の宗教的・社会的倫理を持ち合わせている経営者は多数存在していた。労働者も社会の内
部から失われつつあった生きがいややりがいを就業労働に見出し、企業への帰属意識を強めていた。経営者、労働者ともにまだ市場経済に破壊し尽くされていない経済関係のなごりの理念やイデオロギーを持ち合わせていたのである。

日本的経営はすでに大企業の経営組織や手法としては滅んでしまった。昨今の経営者たちのモラルハザードを見聞するにつけ、日本的徳性などつくに消え去っていると思う。中国社会の深刻な道義的荒廃から社会主義が破壊し尽くした儒教思想の再興が開始されていると聞く。日本では儒教思想を徳目とし

たエリート教育はとつくに消滅している。今では日本的経営の再興はそれ自体としてはありえない。日本のリーダーたちの品性を見てみたらよい。リッチとプア、勝ち組と負け組のコンセプトが当たり前のように論じられ、社会に内在すべき連帯性の理念などすっかり消え去っているのだ。

地球環境問題や貧困問題の現状を見聞するにつけ、私は自分が育った時代の地域市場や家族関係に組みこまれていた宗教的倫理や連帯感を思い起こす。それらの倫理や連帯性の再興なしには地球的課題の解決はあり得ないのではないか。忘れられていた「もつたいない」という言葉が外国から再導入されているが、その言葉を使う人びとはそれが当時の宗教習俗に裏付けられた自然への畏敬の念の表現であることなど知るはずもない。あまさず食したのは貧しかったからではない。生物を殺し

て得た糧に対する感謝の表明であった。自然に対する感謝と畏敬の念の再生なしに地球的課題への取りくみは不可能だし、日本に住むものの貢献などあり得ない。

画一化に対して国民経済の個性をまもることは、グローバル資本主義に抗する重要な道である。個性が破壊され失われたのであればそれを再構築することが必要である。その上で地球を構成する多様な経済が学び合うこと、協同することが求められている。

類的能力の復活をめざして

グローバル資本主義への抵抗の主体を貨幣的に把握される市場経済の内だけに求めてはならない。長い道のりになるが、市場の外に措置されていた経済的關係と理念の意義を見直し、その復権に努力することが重要である。本来的に人間的な経済的能力、類的能力の意義を再発見し、それによって包み込まれた市場を実現しなければならない。

人間の経済活動には、生存維持に関わる経済活動が基礎にある。効率とは違った關係を中心にした経済活動である。資本主義はその關係を侵食して「市場経済」を拡大してきたが、それを浸食の行き着く先は、「弱肉強食」のイデオロギーと拝金主義の蔓延する社会でしかない。この社会が人間的であるはず

がない。

現代の危機の中で求められているのは、市場の外にある関係と理念の再興であり、本来的な類的能力の復活なのだ。

著者紹介

佐々木 建（ささき けん）

一九三六年、北海道根室町（現在の根室市）に生まれる。国民学校（現在の小学校に相当）四年の時にアメリカ海軍艦載機の空襲で家を焼かれ、家族の一人を失う。このまちで高校までを過ごし、大学進学時にはじめて津軽海峡を渡り「内地」を体験する。東北大学経済学部、同大学院経済学研究科で学びの手ほどきを受ける。その頃に自由と平等、平和の思想に目覚める。東北大学に学位論文『現代ヨーロッパ資本主義論―経済統合政策を機軸とする構造―』を提出して経済学博士となる。いくつかの大学で教員をした後、現在はネット上に京都グローバリゼーション研究所 (<http://www.focusglobal.org>) を設立し、学びを続けている。京都市在住。

京都グローバルゼーション研究所

eブックシリーズ 1

私の学問と民主主義

著者 佐々木 建

発行日 二〇一三年八月

発行所 京都グローバルゼーション研究所

©2013 Ken Sasaki

ISBN 948-4-9907310-0-7